

一人で楽しんでるのはきつとこれからも変わらない。何をしているのかもわからないけど、そつとしておいてほしいと願う。一人そんなことを考えていた。どうしてという言葉は何もなけれど、そつとしてほしいと願うのは、どうしても何もできないことと変わらない。時々、忘れるかのように笑いだしたから、怖がられていて。そして涙を流すのが嬉しくて。

一人泣いたのだ。

私は自分の意思というものが薄弱でどうにもできないのが壊されていく中、一人で何もできないと考えてしまうのがいけないと考えてしまう。それでも自分のことを思い出すことで、何かを大切に作る、そんな気分も味わうことなく、一人で居てしまう。そんなことはいけないんだと自分に言い聞かせて、そしてこれからもそうやって大切にすることが重要なんだと。それが嬉しくて。どこにもないことはどこにもないのだと。私はよく笑っていたのだが、思い出すことも、また重要なんだと信じているから。そしてとても大切な心をずっと護っていきたくて、そんな風に私を見てくれる人がいることも嬉しいのだと。そんなに考えてしまうのが嬉しくて、たまに夜空を眺める。

綺麗だなと、何度も思うそれは、私の心を潤してくれて、喜びの感情を抱かせてくれる。涙を流しているのがあの鳥も、隣にいた人にも伝わっているのかなと考えるのも私には嬉しくなるのだから。とても、とても簡単なこと、なんだと、一生懸命に伝えてくれたそれは、私のことに嬉しさが伝わっているんだらうと信じているから。鳥の詩を聴きたくて、私は涙を流す。

嬉しくなって、涙を流す。そして何度も壊れなかった私の心情を涙で隠してしまう。どうしても答えを求めてしまうのはいけないことなのか。欠片を集めて、パズルを作るかのように好きな絵をどこに持ち寄ろうかと考えて、はたと考え込む。

この家の中に好きなものだらけで埋まっている、宝物がたくさんあることに。

それからは早かった。自分のことだけを考えていた、そんな人からもらったプレゼントをゴミ箱の中にたくさん捨てる。家の片隅に残されていたゴミを次々捨てていく。気持ちが良いと感じるのはやはり、楽しいからだろうか。写真集や、画集。素敵なイラストや漫画。どこにも転がっている、そんな意味のないものに何かを感じろというのは無理だろうと、何故か形を為した自分の欠片が、忘れていけと次々に、次々に。失ってしまったものは何もない。捨てることは失うではない。決して、それだけは違うんだと自分に言い聞かせる。

私は掃除をしている。とても大切なものをどこで見つけてしまったのかは今ではわからない。ただど見つけたことは覚えていて。それだけ大切にしていたんだということでもあり、そしてこれからも一生懸命増やしていくのだろう。そして思い出を作ることを楽しみを抱くことに慣れていくことに、そして。私の感情はとても大切。あなたの感情もとても大切。

時々自分で思い出そう。そして喜んでみたいんだと。

それが私の原初。いつの日か大切にしていたことを思い出して答えを導くことがたくさん必要なだと知ってしまったから。それが大切なことなんだから。自分の中で育む頃合いの愛

情をいつの間にか大切にしていた。時々のように思い出す世界について、私が知っていることは何も知らないということ。それほど何もしなくても一生懸命に世界のことを知りたくて。涙を流して、ながして、流し切った。それほど自分の愚かな面に憧れを抱いていた時期があったことも今ではどこか遠い空の向こうに置いてきてしまったのかもしれないと。どうしてそんなことをしているの？ 私は貴方を信じているよ。いろんなことがあった。様々なことを思った。そして。

時の空は啼いた。

一人で慎んで行動していると時々目の前が真っ暗になる。なにも出来ないんだと絶望していることがこんなにも難しいことだとは思わなかった。それが本当の絶望なんだと気付いた日から、私は嫌になることが多くなった。私のことを救ってくださいと神々に祈りを捧げたくて。それでもどこか遠くに救いの手があるのだと信じているから。私は、わたしは。とどこどこに答えがあるのだと知ってしまったても、どこにでも行っている人々の先についていく。それだけ、私は未来を信じている。

一つのことを成し遂げることが私には難しいが、それほど大切なことなんだとわかっているから、いつまでも同じようなことを繰り返して見せると、何故か、その思いに燃えている私があった。嫌いなことは嫌いだとはつきり言えることはとても大切なんだと、自分に繰り返し言い

聞かせる。私はどうしてこんなにも熱いのか、今はまだわからないのだろうけれど、いずれにしろ、世界の中で私は何をしているのかを知りたくてここまで来たのだろう。

そしてこれから知っているから、世界の中で何をしているのかもわからず、そしてこれらを繰り返すのなら、それほどなことをしているのだと、私はどうして、と。願っているわけではない、ただ、自分の信条を守ることがこんなにも難しいのだと、きつとあの人は言ってくれるに違いない。ただ、それだけ。

いずれにしろ、答えを求めているのならそれをどこか遠い未来に想いを馳せている人のことを森の中に入っている自分と被せるのだからやはりわかりにくくなってしまっているのだと思う。それはとても遠い場所にあるのだろう。それが好きなんだから。きつと私は何をしているのかもわかっている。だけど、とどころに綺麗事を求めている人がいると聞いたときから、私の感情に火がついてしまった。笑えるけれど、笑えない。感情を燃やしているのが好きなことなんだと、そう自分に言い聞かせるのも悪くない。そして何度も思っていたことがそうして業火となり、煉獄の中で燃やされる。たとえ話だなんて、私は信じない。ただただ、あるがままに想いを宿らせることで人に伝えようとする心に私は思い出す光景。そして、そして。

時々、空が曇る。そんな中、私の心に一つの夜景が映る。綺麗な星空にはとても大切なものが用意されているのではないのかと、ふと、思うのだ。人は簡単に変わるわけがないのだと信じているのなら、人を簡単に変えることができないということになる。そんな風に、私は

煌めく星々に想いをぶつける。いつまでも変わらない世界のことなんて忘れて、一生懸命未来のことを考えようと、改めて思った。そして過ぎ去る日の中、いつものように、何もしい自分が呆れてしまった答えを今でも覚えていてる。

そんな夜空が今でも輝く。二人で見つめている、その空をじつとカメラに映している私はどうして涙を浮かべているのだろうか、考がえてしまった。続いているのは何なんだろうと、心をじつと見つめる。綺麗な夜景だ。ただそれしか言ってくれないけれど。それでもそつと隣にいる人の手を握る。さすつて、惜しいまでに、失いたくないと思い、そしてこの時がいつまでも続けばいいと、何度も思った。きつと私の心にも届いている、あなたの想い。そしてずつと隣にいてほしいと星々に望んだのだ。

それが全ての始まりだったのかもしれない。それが全ての終わりだったのかもしれない。そして望んだのは。

世界の平和と争乱。それだけだった。

ところどころに図書館が建築されているのが最近分かってる。とても大切なものを保存する場所として有効利用したい。私はそう考えているが、もしかしたら世界の終末を考えている人たちが人類の滅亡に危機感を抱いているのかもしれないと、そうも考えられるのだ。私はとにかく、最近、青空を見ながらそんなことを考えていた。

一人で楽しむのも訝しむ。ただ、何をすればいいのかわからないけれど、いつもそうやって楽しんでるのが自分だと言いついて聞かせているのは私だけなのかもしれない。空が青くて、水色のシャツが輝いている。好きな服は綺麗な陽射しに当てられるのが嬉しそうだった。

時々、思うのだ。独りぼっちの世界を創って、そこから、一人で輝いている、空をずっと見たい、と。私には何もわからないのだと知ってしまったが、空を見ていると、自分の気持ちがすうっと消えていくのだ。私の故郷にもあつたのだろうか。

最近、思い出すことがある。森の中で暮らしていた生活を。樹々に囲まれて、好きな果実を取って食事を楽しみながら、一人の生活を。思い出の中には私と、一緒に暮らしている熊なのだろうか。榎熊が可愛くて、一緒にご飯を食べていた。そして他にもいろんな生き物と楽しんだ。ブラックチェリー。私が好きな果実だ。これを飲み物に代えるとてもおいしい。グラスの中に入れて、外の光に当ててみると、とても綺麗だった。黒いけれどそこにカシス色に濁っている。言い方が悪いけれど、それでも綺麗だと言いたいのだ。

私はいつも森の中で楽しみにしていたことがたくさんあつた。それはいつものように薪を拾っているのもそう。そしてこれからもこんな暮らしが続けばいいと思つた。でも、でも。

図書館について、詳しい人がいた。その人が森の中まで私に教えに来てくれたのだ。よくわからない私に、その人は丁寧に教えてくれた。魔術が使われているなど、たくさん面白いものがあると。異世界への入り口に何かを拾っているおじいさんと一緒に信じたらしいと、思っ

ている。とても大切なんだなと、何故か、思ってしまった感情が壊されていく。

少しずつ、異世界の扉が開いていく。綺麗な扉が目の前に。真っ白い背景に一つの鋼色の扉が置かれる。私はドキドキしながら開こうとする。

「起きて！」

「え？」

私は誰かの声が聞こえた気がした。どこかでそんなに焦らなくても、という声も聞こえる。私はよくわからず、周りを見るがここは森の中だった。何も気にすることがないのだと、それほど、大変だと。街並みの中に一人いられる、自分が誰かの為に何かをしているのだと、意味が解らず、意味を解らず。そしてこれからもその人が私に教えてくれる日々が来ないのだろうか。

今でも脳裏に映っているのは夜空の星々が煌めいている姿だった。そこから声が聞こえているのだろうか。私の感情はひっそりと鳴いているのにも気づいている。私の涙は散らせない。キラキラ輝いているのは私の灯火なんだろうか。

「だから、何寝てるの。そんな時間じゃないでしょ」

誰かが私のことを呼んでいる。そして目を開くと。

そこは私の知らない小屋の中だった。